相手は無防備にすべてを見せているのに、こちらはまったく見られることなく
その相手を見ることができるという疑似的知覚を反復することによって。
窃視的な視線の使いかたが身についたことによって。
・切迫的な力を失った顔（＝像）の経験の反復（12段落）
←
特異なもの・個的なものとしての〈わたし〉に対する呼びかけとしての〈顔〉
は漂白されてしまう。
つまり＝
（像としての）顔の過剰が（呼びかけとしての）〈顔〉を過少にしている。

筆者が指摘している〈顔〉と顔面の区別などの内容をよく読み取る。

(1) 「窃視症的」とはどういうものかは、1段落の「他人と目がかちあわないような状態でしか、つまりこっそり盗み見するというしかたでしか、他人の顔をまなざすことはできない」からつかんでいく。そして、11段落の「双方向ではない一方通行の関係、つまりはのぞき見（窃視）的な視線の使いかた」に着目する。ここから、「窃視症的」とは「一方通行の関係」であることがわかるが、設問は「窃視症的ではないふつうの状況」を求めているので、「一方通行」と相反する「双方向」が答えになる。

(2) 同じ段落の内容に着目する。「うれしい、たのしい、かなしい、くるしい、おもはゆい、はずかしい、いらだたしい……そういう感情にぴったりと対応する顔つきがある。そしてたがいの表情を読み取りながら～」とあり、それを受けて、次の文で、「そのかぎりで顔とは記号である」と続いている。したがって、この内容と合致するウが、正解となる。

(3) 筆者が、〈顔〉と顔面を区別している理由、その違いを読み取っていく。9段落で、筆者は、〈顔〉を「他人への呼びかけ、訴えかけ、つまりはひとととしてのだれかある他者への切迫力のある現れが、〈顔〉という現象なのだと思う」と述べている。それを受けて、10段落で、「〈顔〉は、そういう、ひととひとととのじかの接触のなかで生まれるのだ」と述べている。この部分から書き抜いていく。

(4) この段落は「そういうせまりくる～」という一文で始まっているので、前の段落の内容を受けていることがわかる。前の段落の中で、筆者は、〈顔〉は見られることをこちらに「切迫」するものであると述べている。そのことから、「顔面」はこちらにそのような「切迫力」をもたないもの、つまり、単なる「対象」であるということになる。

(5) 「交換不可能な存在」ということばから考えていく。本文では、12段落に「特異なもの、個的なものとしてのこの〈わたし〉に対する呼びかけとしての〈顔〉」とある。他との交換ができないということは、「個別」のものであり、「特殊」なものである。

(6) 〈顔〉の「切迫力」が話題となっていることを捉えていく。11段落の初めに「だれかへの訴えとしての〈顔〉が、いまとても貧しくなっているように感じられる」とある。イは「像」、つまり、テレビ画面に映る顔に「すり替えられる」とまでは述べられていないので不適切である。

2 小説（神西清「少年」より）

文章のおおまかな内容は以下のとおり。

小学校の修業式
少年は級の総代にえらばれた。
受持教師の家で進級式での作法や進退を教えられ、練習をした。
修業式の五日ほど前
祖母が息をひきとった。
持病がなかったので老衰死である。

【少年の気持ち】
当然のような顔をした。
礼をしたときに、教師の体臭をかいだ。
←
煙草のやにと、いいようのないじめじめした臭いがした。
←
「きっとこの先生は不幸せなのだ」
同情と一しょに不快さがこみあげた。
←
不快さ…相手へではなく、同情を感じた自分への不快さ。
父がおいおい手ばなしで、まるで子供のように泣きながら家の中をうろうろしていた。

SAMPLE

←
父の様子を何か不思議な見物を見るように眺めた。

祖母の口を割箸の先につけたガーゼで拭かされた。

←
・老女のしなびきった唇を、醜いと感じただけに過ぎない。
・半公開の儀式にまで仕立てる大人たちの愚かさに、へんな軽蔑の情をおぼえただけにすぎない。
・祖母に同情。

祖母の死ぬ日の朝、近所の大きな黒犬が庭へまぎれこみ、しきりに遠吠えをした。
→
・あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思った。

葬列や葬式
→
・長たらしく退屈な、無意味な行事。
・みじめなさらし者にされている自分だけを意識。
・腹だたしく、口惜しかった。

修業式後帰宅した。

母に小さな免状と大きな優等証書を見せた。
→
・母は、ちょっとひろげてみて、「そう」とにこりともせず、呟くように言った。

←
「よかったね」に類する慰めの一言が欲しかった。少年は甘えたかった。ほんの少し。ただ、ほんの少し。
←

自分の勉強机の前

・甘えられなかった思い。
・祖母のいない空虚さを感じた。
・祖母ならば「よかったのう」と言って、ほうびを出してくれ、頭を撫でてくれたはず。しかし、それをしてくれる人は五日ほど前から、突然いなくなっていた。

←
・祖母不在の感覚が、痛いほど少年をしめつけた。
・一種の罪障感と自責の念が、黒々とよどんでいた。

祖母…少年は、甘えぬき同時にまた避けぬいた。自分から何の感謝のしるしも受けとらずに、黙って死んだ。

・取り返しのつかないものが「死」である。
・空虚感と自分への怒り。

母に「お祖母さんは？」と口に出した。
母はけげんそうに少年を見た。
哀れむようにじっと見つめた眼を、よそへそらした。
→
・しまった、と思った。

「母」と「祖母」の違いから、「祖母」を失った空虚感を感じた「少年」の心の動きを読み取る。

(1) ① 直前の「息を」に着目する。「息をひきとる」とは「死ぬ」という意味である。

② 直前の「眼を」に続くことばである。「母」は、「少年」を哀れむようにじっと見つめていた眼を、よそへそらした、という文脈になる。

(2) **a** 「祖母への追慕」と「一種の罪障感と自責の念」の関係から考えていく。「裏

SAMPLE

はら」とは「裏表、反対、あべこべ」という意味である。ともに、「少年」の感情であり、「関係がないもの」とまでは言い切れないので、**イ**は適切でない。

b 「けげん」は「不思議で、納得のいかないさま」という意味である。「祖母」が死んでしまったのに、「少年」が「お母さん……お祖母さんは？」と言ったので、「母」は不思議に思って「少年」を見たのである。

(3) 「相手にたいする不快さではない。同情という心理にたいする先天的な不快さであった」と続いている。「少年」は、「教師」の体臭である煙草のやにと、もう一つ、何かいいようのないじめじめした臭いに、「きっとこの先生は不幸せなのだ」と同情したが、そういう同情の気持ちを生まれながらにして覚える自分に対して、「不快さ」を感じているのである。

(4) 「祖母」が死んだとき、「少年」が「何か死の実感に似たもの」を感じたのは、「あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬもの」であった。そして、五日が経過し、「祖母の死を、はっきり現実として受けとった」のは、修業式が済んで、免状と優等証書を持って、家に帰ってきたあとである。「少年」は、「母」から「よかったね」という言葉をかけてほしかったが、そういう言葉はなかった。そのときに「祖母」の「死の実感」を身にしみて感じたのである。「死」とは、「空虚」で「不在」で「取り返しのつかないもの」であるということを「少年」は理解していったのである。

(5) 「少年」は「祖母」を思い出している。「祖母」なら、「母」と違って「よかったのう」と言ってくれるばかりでなく、頭を撫でたり、ほうびを出してくれたりしただろうが、そのとき、そういう「祖母」を傷つけないように、無理に嬉しそうな顔をしただろうと思っている。「体裁を整える」という意味の「つくろう」から考えていく。

(6) 直前の二つの内容から考えていく。「祖母のいない空虚さ」とあるので、「空虚感」は、「祖母」の死による不在が生じさせたものである。さらに、「自分への怒り」とは、「一種の罪障感と自責の念」である。それは、具体的には、「祖母は、自分から何の感謝のしるしも受けとらずに、黙って死んで行ったのだ」とあることから、「祖母」に「感謝のしるし」を伝えられなかった自分を責める思い、ということになる。

(7) 「母」については、「心のどこかで愛してはいるのだが～一種の嫌悪と反発」を感じるとある。また、「祖母」については、「甘えぬき同時にまた避けぬいた」とある。この二つの部分のことばを用いてまとめていく。

---

3 **古文（「宇治拾遺物語」より）**

〈全訳〉今は昔、丹後の国（今の京都府の北部）に年老いた尼がいた。地蔵菩薩はいつも夜明け前ごとにお歩きになるということを、ちらっと聞いて、夜明け前のたびに、地蔵を拝み申そうと、あたり一帯を夢中で歩くと、ぼんやりしていたばくち打ちが（尼を）見て、「尼公はこの寒いのに何をしていらっしゃるのか」と言うと、「地蔵菩薩が夜明け前にお歩きになるというので、お会い申そうと、このように歩いているのです」と言うと、「地蔵がお歩きになる道は、わたしがよく知っています。さあいらっしゃいな。会わせ申しましょう」と言うと、「ああ、うれしいことよ。地蔵のお歩きになるところへ、わたしを連れて行ってください」と言うと、「わたしに物をお与えください。すぐにお連れ申しましょう」と言うので、「この着ている着物を差し上げましょう」と言うと、「さあ、いらっしゃい」と言って、隣の家へ連れて行く。

尼は、喜んで、急いで行くと、そこの家の子供に、地蔵という名前の子がいたが、（ばくち打ちは）その子の親と付き合いをしていたので、「地蔵は（どこにいる）」と尋ねると、親は、「遊びに行った。もうすぐ帰るだろう」と言うと、「さあ、ここです。地蔵のいらっしゃる所は」と言うと、尼は、うれしくなって、つむぎの着物を脱いでやると、ばくち打ちは、急いで受け取って去る。

尼は、地蔵にお会い申そうと待っていたが、親たちは合点がいかず、どうしてこの子に会おうと思うのだろうと不思議がっているうちに、十歳くらいの子供が来るのを、「さあ、地蔵です」と言うと、尼は、見るやいなや、夢中になって、ころげまわり、拝み込んで地面にうつ伏した。子供は、細長い若枝を持って、遊びながらやって来たので、その若枝で、手遊びのように、額をひっかくと、額から顔の辺りまで裂けてしまった。裂けた中から、言いようのないありがたい地蔵のお顔が、お現れになる。尼が、拝み込んで仰ぎ見ると、このようにお立ちになっているので、涙を流して、拝み込み申して、そのまま極楽往生をとげた。

そのように、心に深く念じさえすれば、仏もお姿をお見せになるものであると信じるがよい。

(1)① 「世界」には「世の中、世間」という意味もあるが、ここでは、直前の「暁

ごとに、地蔵見奉（たてまつ）らんとて」から、「あたり一帯」の意味になる。

② ここでの「やがて」は「すぐに、ただちに」という意味である。「わたしに物をお与えください。（そうすれば）すぐにお連れ申しましょう」と、ばくち打ちは言ったのである。

(2) 地蔵菩薩のいる場所に案内された「老尼（ろうに）」は、「うれしくて、つむぎのきぬをぬぎて、取ら」せている。「つむぎ」とは、絹織物の一つである。

(3) 「そこの子に、地蔵といふ童ありけるを、それが親を知りたりける」とあるので、「それ」が「童」を指している。

(4) ばくち打ちは「老尼」に対し、「くは、ここなり。地蔵のおはします所は」と言っている。これを聞いて、「老尼」は、地蔵菩薩のいる場所がわかり、うれしくなっている。

(5) 「童」は地蔵という名前ではあるが、本物の地蔵菩薩ではない。わが子の地蔵を訪ねてきて、さらに、喜んでいる「老尼」を見た親は、なぜこの子に会いに来たのだろうと、不思議に思ったのである。

(6) 地蔵という名の童が、細長い若枝で、手遊びのように額をひっかくと、額が裂け、その中から、ありがたい地蔵菩薩のお顔が現れてきたのである。心に深く念じていると、仏さまもお姿をお見せになる、という内容の説話である。

4 **詩（山本太郎「生れた子に」より）**

(1) 「生れた子に」という題の詩であることの意味を考える。生まれた以上は、たとえ、その人生には挫折（ざせつ）や困難が待ち受けていたとしても、その人生を歩んでいかなければならない、ということを言っているのである。

(2) 「太陽」はどういうものの象徴かを捉える。また、「投げる」のは、「小さな疑いの石」である。その「石」は三〇年もすれば、落ちて自分の額を撃つだろうが、それまでは、希望を持って積極的に行動してほしいという願いが、この表現には込められている。

(3) 父親もまた挫折や絶望をし、そこから立ち上がってきたことを述べながら、自分の子にもそうあってほしいという願いを込めた詩である。

5 **文法**

(1) 格助詞の「に」で、「買う」が「行く」という動作の目的を表しているので、**イ**である。

(2) 格助詞で相手を表す「に」である。よって、**エ**である。

(3) 格助詞で状態を表す「に」である。よって、**オ**である。

(4) 格助詞で鬼に金棒を添えるという意味を表している「に」である。よって、**ウ**である。

(5) 格助詞で信号の色が変化し、赤色が生じたことを表す「に」である。よって、**ア**である。

確認しよう！ ●「に」の識別●

問題で取り上げられている「に」は、すべて格助詞の「に」である。「に」には、次のようなものもある。

・副詞の一部…「すでに」「大いに」など
・形容動詞の一部…「静かに」「豊かに」など
・接続助詞「のに」の一部…見たいのに見られない。
・助動詞の一部…「来るように」「降りそうに」など

すべてが助詞の「に」とは限らないので、注意しよう。

6 **漢字の読み書き**

(1) 神社や寺院の敷地のこと。「境」の読み方に注意。「キョウ」ではない。

(2) 「似」の読み方に注意。「類似」「相似」のように「ジ」である。

(3) 「朗」の音読みは「ロウ」である。「朗」を使った熟語に「明朗」などがある。

(4) 「道理や原因などを徹底的に追究して明らかにすること」という意味の「究明」である。

(5) 「隠」を「穏」と書かないこと。

SAMPLE

(5) 「倹」を「検」「険」「剣」と混同しないように。

(6) 「映」の訓読みには、ほかに「うつ（る）」もある。

補充問題

1 **次の各問いに答えなさい。**

(1) ①～③の各文の□に入る適切な語をあとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① あの作家は、長期間□をひそめていたが、活動を再開した。

② 今まで抑えていた感情が、□を切ったようにあふれ出した。

③ 相手にとって良い条件で、こちらは□を食うことになった。

ア 口火　**イ** 手　**ウ** 声

エ 割　**オ** 拍車　**カ** せき

キ 鳴り　**ク** しのぎ　**ケ** 泡

(2) ①・②の上と下の熟語が対義語になるように、□に入る共通の漢字を、あとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 可□・否□

② 就□・辞□

ア 業　**イ** 能　**ウ** 任

エ 去　**オ** 退　**カ** 決

SAMPLE

2 次の(1)〜(5)の――線部と同じ漢字を使うものを、あとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 彼の態度は、他者をイアツするものだった。

ア 事件のケイイ　**イ** イケイの念　**ウ** イダイな選手
エ 物理学のケンイ　**オ** 文化イサン

(2) この映画はフキュウの名作である。

ア ロウキュウ化　**イ** キュウチの仲　**ウ** 責任ツイキュウ
エ 罪のキュウダン　**オ** 真相キュウメイ

(3) 地域経済のハンエイを願う。

ア ハンセンに乗る　**イ** 親のドウハン　**ウ** 馬のハンショク
エ シハンの商品　**オ** 絵画のハンニュウ

(4) この小説は、久しぶりに心のキンセンに触れる。

ア キントウに分ける　**イ** キンルイの観察　**ウ** ゾウキン
エ モッキンの演奏　**オ** キンコツたくましい

(5) 私は、料理が得意だとジフしている。

ア ピアノのガクフ　**イ** ボウフ剤　**ウ** 手のフショウ
エ フユウな地主　**オ** 急フジョウする

---

3 次の文章は、ある中学校のコーラス部の秋山さんが学校だよりに掲載するために書いた部活動の報告文である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちコーラス部は、県大会に〜ア〜向けて、毎日一生懸命練習しています。

今の私たちのモットーは「①石に立つ矢」です。これは何事も一心にやればできるはずだというたとえを表した故事成語です。②県内には、全国大会でも優秀な成績を収めた学校が集まっています。そのため、最初は、努力をしてもむだなのではないかと言い出し練習に身が〜イ〜入らない部員もいて、部全体が③やぶさかでない雰囲気になりました。しかし皆で話し合いをして、昨年五位で悔しい気持ちを〜ウ〜味わったことを思い出し、県大会までできることはなんでも〜エ〜やろうと決めました。それからは、先生や専門家の方にアドバイスを④してもらいながら、よりよい練習方法を〜オ〜ためしています。そして以前よりも集中して時間をむだにしないようにみんなで気合いを入れています。その成果をコンクールで発揮したいです。

コンクールは、コーラス部ではない一般の方も入場することができます。

また、⑤案内しますので、ぜひ足を運んでください。

(1) 〜〜線ア〜オの五つの動詞のうち、他と活用の種類が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

(2) ――線①「石に立つ矢」とありますが、これは中国の古典『史記』に由来することばです。その由来となった、次の漢文の――線部を書き下し文に改めたものとして、最も適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

> 廣出猟、見二草中石一、以為レ虎而射レ之、中レ石没レ
> 鏃。視レ之石也。因復更
> 射レ之、終不レ能二復入一レ石
> 矣。

SAMPLE

ア　因りて復た更に射るも之を、終に能はず復た石に入ること
イ　因りて復た更に之を射るも、復た終に石に入ること能はず
ウ　因りて復た更に射るも之を、復た終に能はず石に入ること
エ　因りて復た更に之を射るも、終に復た石に入ること能はず
オ　因りて復た更に之を射るも、終に復た入ること石に能はず

(3)　――線②「県内には」が修飾している文節として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　全国大会でも　　イ　収めた
ウ　学校が　　エ　集まって

(4)　――線③「やぶさかでない」は、本来の意味ではない使われ方をしています。「やぶさかでない」が本来の意味で使われている例文として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　親友の頼みなら協力するのは誰もがやぶさかでないはずだ。
イ　気分がやぶさかでないので、朝から晩までふさぎこんでいた。
ウ　やぶさかでないことをやってしまったので、心から謝った。
エ　自分が昨日食べたものを思い出そうとしてもやぶさかでない。
オ　自分にとってやぶさかでないことは素直に断ったほうがいい。

(5)　――線④「してもらい」と――線⑤「案内します」を、それぞれ適切な敬語表現に直したものの組み合わせとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　④＝致していただき　⑤＝ご案内します
イ　④＝してくださり　⑤＝案内なさります
ウ　④＝致していただき　⑤＝案内なさります
エ　④＝していただき　⑤＝ご案内します
オ　④＝していただき　⑤＝案内なさります

●解答●

1 (1) ① キ　② カ　③ エ
(2) ① カ　② ウ

2 (1) エ　(2) ア　(3) ウ　(4) エ　(5) ウ

3 (1) ア　(2) エ　(3) エ　(4) ア　(5) エ

SAMPLE